

平成30年11月9日(金)

佐藤一斎

江戸から明治にかけて、日本の社会はとても大きく変わり、多くの人たちが不安の中に暮らす中、ある人の教えが、多くの人たちに生きる勇気を与え、新しい日本を作り出す元気を生み出しました。

その人は佐藤一斎といいます。

かの西郷隆盛も、沖永良部に流された時に佐藤一斎の『言志四録』を読み、大きな影響を受けたとされています。

また、その直接の弟子に、佐久間象山がおり、象山の弟子には、吉田松陰や勝海舟、坂本龍馬などがいたのです。

私は、この人の言葉を今の教育長から教えられました。

『一灯を下げて暗夜を行く。暗夜を憂うことなかれ。只で一灯を頼め。』という言葉でした。平成29年の正月であったと思います。

「一張の提灯を下げていれば、夜の道でも暗い闇でも恐れるに足らない。自分の足元を照らすその明かりを頼りにして進めるからである。」

つまり、一灯とは、自分の生き方のことです。自分自身の生き方を信じて進むのなら、時代や環境が違ってても惑うことなく進めるのだという言葉だと解釈します。

自分を導く明かりがあれば必ず前に進むことができるのだと、私は思います。

もう一つ。

『春風をもって人に接し、秋霜をもって、自ら慎む。』

「春のさわやかさで温かく人に接し、秋の霜のような凜とした厳しさで自分と向き合い慎みましょう。」

さらにもう一つ。

『少にして学べば、則ち壮にして為す有り。壮にして学べば、則ち老いて衰えず。老いて学べば、則ち死して朽ちず。』

学ぼうとする気持ちはいつも持つべきなのですね。